

第2話

# 見えない姿を追跡する

1

A Drop on the Palm 1

兄さんと暮らし始めて、今日でひと月と少し。

その間にわかったことが多少ある。兄さんは椅子で寝る、もしくは床で寝る。ベッドもあるがベッドまでほとんど行かない。なので、前にシーツを洗濯してあげた時のまま、ベッドはほこりをかぶっている。

あと、兄さんは思ったよりもゴミが少ない。食べ物のゴミは、僕が見つけたらゴミ箱へと入れている。そして、その他のゴミはほぼ出ない。基本的に家から出ない生活を送っているため、とも言える。

掃除は好きではないので、最低限しかやらない。でもまあ、男二人所帯なので、虫さえないなければいいかという話し合いのもと、生ゴミやゴミはちゃんと捨てる、という取り決めだけはしておいた。

消耗品などのお金は兄さんが出してくれるので、買いに行くのは僕の役割、という感じになっている。お金は兄さん、働くのは僕。

兄さん曰く、以下のような計算になるらしい。

一食分の対価としてはファストフードで三〇〇〜八〇〇円、定食屋で五〇〇〜一〇〇〇

円。家で作った場合は、それより少し下げて一食五〇〇円と仮定。すると、一日三食で一五〇〇円。しかし、学校などで一回二回は作れないこともある。なので、間を取って一日一〇〇〇円。とすると、ひと月は約三〇日なのでひと月三万。これが対価となる。

そして、この部屋の家賃は月に一万円。リビング、キッチン、バス、トイレ以外の部屋数は二つ。一部屋占有したとしても、五分の一から三分の一程度。仮に三分の一だとすれば、三・六万。とはいえ三分の一よりは少ないので、五分の一との間を取って約三万。故に家賃はゼロで問題ない。

問題があるとすれば、ゴミ出しなどの雑務をお願いしていることなので、そのあたりについては何か対価を払う予定なので、よろしく頼む。

こういう計算が、兄さんの中では成立しているらしい。

よくわからないけど、家賃なしってのは本当にありがたい。一回生のうちは頻繁にレポート課題などがあるから、まだ本気でのバイトができない。だから、金銭的に負担にならないってだけでも天国だった。

「優吾、飯は？」

ということ、早速、僕が担当している朝ご飯を催促される。

「今出しますよ。ちょっと待って」

「今日は大学か？」

「うん、平日だしね。朝の制限から行かないと」

「そうか、じゃあ帰ったら寝てるかも知れないから、用があつたら起こしてくれ」

「わかりました」

そうそう、一緒に暮らすようになってからわかったことがある。兄さんは一日二回寝ている。それも夜になるかならないかくらいの時間帯と、早朝の二回。

最初、寝るのが早いだけかと思つたけど、すぐに起きて活動を再開していたので、睡眠時間が短いのかとも思つたんだけど……一日に二回寝ていた。

疑問に思つて聞いてみると、

「その方が集中できる」

ということだった。よくわからないけど、そういうものなんでしょう。うん。

あ、そろそろ出ないと。

教室に入ると、既に大半の生徒は席に着いていたが、僕と同じくギリギリのタイミングで入ってくる人も少しはいる。

一列まるまる空席の長机を見つけ、その真ん中に陣取る。

少しあくびが出るが、無視してかばんからノートとスマホを取り出し、机の上に並べる。

シャーペンと消しゴムも。

授業開始時間だけど教授はまだ来ない。ノートに前回の講義の整理をしておこうと思い、シャーペンを手に取る。けれど、芯が切れたのか、ノックしても出てくる気配がない。

前に結構、芯を入れたと思ったんだけどな……。そんなことを思いながら、なおも力チカチしている、ふと、前の方での会話が耳に入ってきた。

「この前、メール来ててさあ」

「なんて？」

『お客様のアカウントに対し、外部から不正ログインがあり、個人情報閲覧された可能性があることが判明しました』

「うわっ、それまずくない？」

「まずいだろー。慌ててそのアカウント削除したよ」

「んん？ 削除？ 削除して平気なのかな？ あとで兄さんに聞いてみようかな。」

話を聞きながらノックし続けていたら、ようやく芯が出て書けるようになった。

新しい替え芯、買っておかないとな。

\* \* \*

授業も終わり、家に戻る。

扉を開け玄関に入り、下を見ると靴がある。見慣れない革靴。

「た……ま」

いつもの大きさの声を少しだけ、最後に落としてしまう。会話が少し聞えてきて、話を邪魔してはまずい、と咄嗟とつさに思ったからだ。

居間の扉を開けると、スーツ姿の見知らぬ男性が、兄さんと気軽な感じで話し込んでいた。

きつちりとスーツを着こなし、ぱっと見さわやかな好青年のようだったが、口元が絶えず笑っているようにも見えた。髪は普通の長さで、体格は少しがっちり目だけど、太っているという程ではない。体育会系に見えなくもないけれど、何よりも口元が特徴的で、その部分ばかり気になった。

「今回の一件は、うちの課だけじゃ手に負えないんだって、ほんとに」

それに、兄さんが間髪を容れずに答える。

「前も似たような事を言っていたが、結局こつちが準備をしていたら連絡もなく放置されていたじゃないか……。前のようなことはもうゴメンだ」

「いや、あれはすぐ別のヤマが来てこつちに関われなくなっただけで、すぐ連絡入れようとは思ったんだけど、なかなか時間が……」

「時間がないなら丁度いい。お帰りはあちらだ」

兄さんの手が僕の後ろにある扉を指さす。その時初めて僕の存在に気がついたようだ。

「ああ、優吾。帰ってたか」

そう言うのと、優しい笑みを浮かべた。

来客の男性も同じく気がついていなかったらしい。

「君が菊宮優吾くんか。こんにちは」

「こんにちは」

挨拶を返す。

「よろしい。挨拶は大事だな。うん。私は京都府警の田所たどころという」

「え、警察の人？」

思わず身構える。何かやったんだらうか？ 兄さんが？ 僕が？

「あ、そうじゃないそうじゃない。やましいことは、手代木も君もやってないよ。まだ」

——まだ？ ちょっと気になる言い方だ。

「手代木とは同級生だね。たまにこうやって訪ねては、捜査上の手助けをしてもらってる」

「生憎と、手当ては貰ったことないけどな」

と兄さん。

「いやいやいや。金じゃないだろ、俺たちは。まあ、そういうわけで今日のところは帰るが、また来る。協力については考えておいてくれ、な。あくまで金の問題だって言うのな」

ら、上に掛け合っておくから……あ、最悪自腹で払うから。薄給たる自腹で」

薄給たる、ってそこを強調するんだ……。

「うざい。もう来るな」

田所さんは、そう兄さんに言われてもめげずに、

「いやいや。必ずまた近いうち来るから。じゃあね」

そして僕の方に向き直り、

「菊宮くんも、またね」

「あ、はい……」

「騒がしい奴だ」

田所さんが出て行ったあと、少しして兄さんが口を開いた。

「田所さんて、どんな人なんです？」

一緒に暮らし始めてからほぼ初めての来客だったので、どうしても気になった。

「大学時代の同期だ。ああ、あいつは『同級生』と言っていたな。同級生だったこともあるな。なんだかんだ言っつて、こっちに頼みごとをしては、礼を貰おうとするとすぐ逃げる。手間賃もくれない嫌な奴だよ」

「仲はいいんですね」

僕は、思ったままを言った。

「いいのかな？ まあ、人として扱ってはいるかも知れないな。嫌な奴ではあるが、それでも『人』だ」

手厳しい……。

「今でも訪ねてくる珍しい奴だし、外の動きなんかも話をするので役には立つ。でも優吾、覚えとけ。あいつは口先だけだからな。用心はしておけよ」

とはいえ、部屋にそのまま通すだけでも驚きだ。なにせ、ここに住み始めてからこっち、普段は玄関でさようならというケースばかり見ている。

なので、田所さんに興味が湧いたというのが正直なところだった。

自分の部屋で少し作業をしていると、すぐに夕方になってしまった。

そろそろ、夕飯の用意をしなければ。

とはいえ、家には食材が少ないので、買い出しに行かないといけない。お金を兄さんからもらひ玄関を出ると、そこには田所そのひとさんが居た。

「よお、また会ったね。菊宮くん」

会ったね………って。

玄関先にいたら、それはもう「待ち伏せ」じゃないだろうか？ でも、それを口に出す

前に先手を打たれる。

「おっと、買い物かい？ 付き合うよ。なーに、荷物くらいは持つから」

\* \* \*

商店街に出て、野菜や魚などを買う。田所さんはそのたびに「それ、持つよ」と、律儀にも強引に、荷物を持ってくれる。ほとんど喋らず、周りばかり気にしていた。

ある程度買い物が進んで、そろそろ家に帰ろうか、という時になって、

「少し、いいかい？」

どうやら、タイミングを見計らっていたみたい。

「手代木の話では、育ての親のところの息子で、ほとんど兄弟同然に育ったってことだけど……間違いない？」

「はら」

「ふむ。手代木がどういう奴か知ってる？」

「いい兄さんです」

それ以外にない。いい兄さん。今までも、これからも。

「そうか。では、私から見た手代木の話でもしようか。手代木は一言で言うところの『頭の切れぬ奴』だね。大学時代も研究課題があるとその要点をすつと言葉にし、それを文章にし

て提出してしまう」

「はあ」

兄さんなら、まあそうだろうな。という気がする。

「で、それ以上に凄いのが、コンピュータ系の能力なんだよ。彼の凄いのが」

すごいすごいと二回言うことは、ホントに凄いと思っっているのだろう。

「前の会社でも、能力がいかななく発揮されていたし、あんなことさえなければ未だにトップの研究員だっただろう。だから、今でもコンピュータがらみのことは凄いんだ」

はあ。

「……で、だ」

「はう」

「後で、いや、夜にまた資料なんかを持って手代木の家に行くから、君の権限で通してくれないかい？」

けんげん？ どういうこと？

「権限っていったい？」

「いや、手代木は、夜は滅多に人と会ってくれないんだ。それこそ、奴が気に入ったことでもない限り滅多にね」

滅多に？ でも……。

「どういうことです？ 僕は最初から、夜でも昼でも会ってくれましたよ」

「うん、そこなんだ。そういう人だと思っただんで頼んでる。この通り」

そういうと田所さんは僕の前で、腰を曲げてお辞儀をしつつ、両手を合わせる。

「そんなに、会うのが大事なんですか？」

「大事。だいじ。な、頼みます。よろしくお願いします」

と言うと、もつと深々と腰を折る。しかし、手は相変わらず僕を拝んでいる。

大の大人をそのままにしておくというのも、なかなか難しい。

「わかりました。まあ、僕が寝る前なら、部屋まで通すのはできると思えます。それ以上はできませんので、交渉はそっちでやってください。駄目ならすぐ帰ってくださいね」

これが最大限の譲歩だ。兄さんに怒られたら、田所さんには帰ってもらおうしかない。

「恩に着る。奴のことだから、情報さえ与えれば、絶対に調べることはしてくれるはずなんだ」

情報？ 絶対？

いろいろな気にかかる台詞だけど、聞こうとしたところで携帯が鳴った。

僕の着信音じゃない。ということは、田所さんのか。

「はい、田所です。はい、はい。え、今からですか？ えーっと」

田所さんはスマホのマイク部分を押さえて、僕の方に向き直る。

「ゴメン、ちょっと用事ができたので、これでおいとまするわ。夜また来るから、頼むね」  
そう言うのと、マイクを押さえていた方の手で拜む形を作る。

「わかりました。お仕事頑張ってください」

田所さんに持つてもらっていた荷物を受け取り、僕は自宅へと戻った。

\* \* \*

「おかえり」

「ただいま」

姿を見ることなく、兄さんと声を交わすと、そのまま台所に行き、夕飯の準備を始める。  
メインは魚の煮物にする、というのは決めていた。そのために鰯あじを買ったんだし。

野菜は、根菜類を煮ようかと思っただけけれど、煮物と煮物がかぶるので、こっちは野菜炒めにしよう。

そうすると、あとは汁物が足りない。では味噌汁を作ろうかな。味噌は……あるな。

流しの下戸棚を開くと、パックの赤みそがまだ少しあった。よし、今日買ってきた白みそと合わせよう。今まで味噌汁は赤みそばばかりだったし。

決まり。

一緒に住むようになって発掘した、炊飯器とおぼしき物は程よく年季が入っていて、ち

やんと動くかかなり不安だった。なので、新しく五・五合炊きのを買って貰った。少し大きめだが値段が一番安定している、とは兄さんの言葉。

まずは米を研いで炊飯器にセットし、次に魚を煮始める。その間にダシをとり、みそ汁も準備して……というところで、兄さんの声があった。

「優吾、あ、そのままでもいい。作業しながらでもいいから聞いていてくれ。聞いていてくれればいい。勝手に喋るから」

兄さんはたまに、考えがまとまらないとか言っつて、僕相手に一方的に喋り続けることがある。人と会話をしたくはないが、喋りたい時があるのだそう。

会話ではないとはいえ、知らないことの方が多いので、聞いていて面白い。とはいえ、ほとんどお金絡みの話なんだけど。

「それで、株の値動きはローソク足というので見ていくんだが、それが激しいのを値動きが激しい、と言うんだ。ところが面白いことに『激しい』だけではなく名前がついているのが多いのも特徴だね。それを『シグナル』とか呼んでいる」

シグナル。ふむふむ。

兄さんの話を聞いていると、ご飯が炊きあがった音がした。よし、蒸らしている間に野菜炒めを……。

野菜をざくざくと切り、さつとごま油を引いたフライパンに投入。あとは醤油とみりん  
で味を調えながら炒めていく。

このみりんはこの前、「本みりんが売ってる」と兄さんがネット通販で買った、ちよつと  
高級なもの。これだけでも充分美味しい。この前も使ったな、そう言えば。

味見をするという感じの味になっていた。ぱぱっと皿に盛りつけ、あとは白ゴマをざつ  
とちらして、野菜炒めも完成。

これで、今日の夕食は完成だ。そのままテーブルに運ぶ。

そして、その間も兄さんの話は続いている。

「株価っていうのは、人気のありなしもあるが、それ以上に『噂』や『情報』での上下が  
凄く激しいものもあるんだ。財布の金、その人にとって大事な金を預けるのだから、恐  
いところから逃げ出す心理や、良さそうなどころについて、行ってしまおう心理があるんだろ  
うね。が、その情報などが取れない人はどこで見るかというと、先ほどのローソク足のシ  
グナルで見るが多い」

話を聞きつつ、テーブルの上を片づけ、煮物の大きめの皿から置いていく。

「で、だ。今日の朝ちよつと、今まで噂もあまりなかった企業の株が、じわつと変動して  
下がり始めた。下がり始めたんだが、今日一日何もなく、そのまま下がっただけだった。  
これは、明日どうなると思う？」

「どう、とは？」

こういう時の兄さんは、大体考えを僕に聞いてから、整理するということが多い。今回もそうなんだろうか？ まあ、聞かれたら答える。わからなくても。

「そうですね。上がるんですかね？」

上下、と前に言われたので、逆かなと思ったのだ。

「そうだね。大半はそう見るかな」

「違うんですか？」

「多分。もう少し下がって行くんだろうね。この値動きは、市場的に『何か』を待ってるように見えるんだ」

「何か……。それって、なんて会社なんです？」

「ああ、一流というか老舗しほだね。十社製薬じゅうしゃっていう製薬会社だよ。新薬開発を二、三年に一度やる会社だ。でも、去年花粉症用の薬を出したのと、提携先の海外の会社と一緒にその新製品を海外でも出したから、新製品については、落ち着いているはずなんだ」

「へー。あ、ご飯できましたよ。食べましょう」

兄さんの説明話を一旦打ち切り、ご飯に誘う。

「ほう、今日のメニューはなんだい？」

「はい、鰯いわしの梅煮と、野菜炒めと、味噌汁と、ご飯になります。ちよと野菜炒めの量が多めですけど、ちゃんと食べましょう」

煮物の皿よりも少し大きめの皿にこんもりとのおつた野菜炒め。

男二人なら大丈夫な量ではあるけど、野菜をあまり食べない兄さんに先に釘を刺しておいた格好になってしまった。

「いただきます」

「いただきます」

煮物の上に散らした生姜しょうがを、少し厚めに切りすぎたかも知れない。少し辛めになった。

あとは、みそ汁が少し薄味だったかな。次は塩の量で調整するか、味噌をもう少し入れようか……などと考えながら箸を動かしていると、

「味いな」

と、声がかかる。

「ありがとうございます」

つい、敬語になる。

やっぱり、人に作る食事は楽しいな。そんなことを思っていると、兄さんはさっきの話を再開する。

「先ほどの十社製薬だが、優吾の大学を出た人間で、誰か社員とかいないかな？ 少し話

を聞いてみたい。いや、業績とか内部のことはいいので、その人が元気か、明るいかとか  
そういうのを知りたい」

「良いですよ。ちよつと聞いてみます」

「うん。よろしく頼む」

\* \* \*

ご飯を食べ終えて、お茶を飲んでいると、玄関のチャイムが鳴った。  
玄関を開けると、田所さんだけでなく、男性がもう一人立っていた。

「こんばんは」

田所さんがそう言うと、奥にいた人も無言でこちらに会釈をする。スーツ姿だが、少し  
のっそりとした雰囲気醸し出している。

「田所さん、こちらの人は？」

一人で来るとばかり思っていた。

「ああ、こちらはまだ浜田刑事」

浜田刑事と呼ばれた人はこちらの眼を真正面から見て、一礼する。

「どうも、浜田です」

そう言うと、胸ポケットから警察手帳を取りだしてこちらに見せる。「京都府警」という

文字と、浜田さんの写真が確認できた。本物だ。

「ということ、中入れてくれるかな？」

「どうぞ」

居間のドアを開けると、椅子に座ったまま身体をこちらを向け、実に機嫌悪そうにしている兄さんがいた。机の上が綺麗になっているところを見ると、食器なんかは片づけてくれたらしい。後でお礼を言わないと。

「おまえ、また来たのか」

「いや、今度は正式な依頼。頼むって」

ちらりともう一人、浜田さんの方を見た兄さんは、余計機嫌を悪くしたようだ。

「浜田です。どうも、最近のお話は、よく田所からも聞いています」

「手代木です。元氣そうですね」

あれ？ 知り合いなの？

とは思ったものの、とりあえずお茶の用意をしないと。

台所のシンクには、先ほどの食器がそのまま置かれていた。まあ「置くだけ」の時間しかなかったしなあ、と思い食器を洗う。

背後からは、話し声が漏れ聞えてきた。

「そういうことはそっちが専門だろ？ 一般市民がやると、犯罪者扱いして締め上げるのが、その手の案件じゃないか？」

「うちにできるのがいればね。ちよつとそこまでのレベルはいなくて……」

兄さんに対して弁明するのは田所さんの声だ。

「だったら、民間のセキュリティ会社に頼めよ」

「関わる人は少ない方がよくてね。この手の話は……」

「いや、だからって……。俺じゃなくても良いだろ？」

「僕が話してどうこうできるのは、おまえくらいなもんだからね」

「他のそういう人間をあたれよ。いろいろいるんじゃないのか？」

「まあ話くらいは聞いてくれよ。な」

その後、声が小さくなって聞えなくなった。会話の声は主に田所さんと兄さんで、浜田さんらしき人の声は聞えてこない。

インスタント珈琲を四つ用意して、お盆にのせて居間に行く。

「すみません。こんなものしかありませんが……」

「お、ありがとう」

田所さんは紙コップを二つ取り、一つは浜田さんに渡した。兄さんにも差し出すと、コップの縁と縁を指先で丁寧に取り、そのまま机の上に移動させる。

自分の分は邪魔だったかな……と思ひ、一つだけカップが残ったお盆を持ったまま、

「えっと、大事な話なんですよね。奥に行ってます」

と言うと、兄さんは、

「いや、もう関係者だから聞いておいてくれ。いいよな？」

田所さんは、ちよつと苦い顔。

「うーん、まあ……ここに僕が来てるってことも、知ってるしねえ。いいんじゃないかな」  
そう言われたので、僕も隅に座って話を聞くことにした。

\* \* \*

「えーつと、どこまで言ったか……そうそう、要は『どこからやったのかはわかるが、突き止められない』ってことなんだ」

え？ 「どこから」がわかれば突き止められるのでは？ と、さも当然な疑問を頭に浮かべていると、

「中国から日本の各企業、それも、大企業ばかりを狙っての情報漏洩ろうつぱいを意図したと思われるアタックが、ここ数日急激に増えていますね。こちらでも調べはしたんですけど、いろんな場所のサーバーに分散されて特定ができない。多分Proxサーバーなんだろうけど」

「同じタイミングで同じ攻撃方法なのに、元のサーバーが全部違う、っていう話か」

「そうそう。それ」

「だとすれば、そういうプログラムを組んで対処したんだろ。macroだろうが、scriptだろうが、最近は小学生でも書いてるって話だし。proxyサーバー自体もそれ専用のダメーかも知れないな。でも、そんなものはタイミングとデータパケットをキャプチャすれば癖が見えるから、大体わかるもんだろ？」

「いや、だからそれがわからないんだよ」と田所さん。

顔をちらつと見ると、かなり本気のように、顔にも熱を帯びているのがわかる。

「ふーん」

兄さんはあまり興味なさそうな返事をして、顔をモニターの方へと向ける。そのままカチカチとキーボードを押して、ちよつとすると、また顔をこちらに向けて喋りだす。

「どこからやったのかはわかる、と言ってたな。えーっと、中国か。中国のどこから。というまでわかるのか？」

「ああ、そこは大体。上海<sup>シャンハイ</sup>じゃないか、つてところまでは……」

「大体？」

「その手のproxyサーバーが一番多いところが、上海なんで……」

「ああ、そういうレベルでの話か。ふうん」

「頼むよ、ちよつとピンチなんだ。手助けしてくれよ」

「ただ働きは、やらん」

そう言うのと、兄さんは身体ごとモニターの方へと向ける。くるつと音が出るんじゃないかと思えるくらい綺麗に。

ずっと珈琲を飲みながら、やりとりを見ていた浜田さんが喋ったのは、その時だった。

「手代木、何も『ただ』ってわけじゃない。俺がここにいるってことは、課で手代木、おまえに『仕事として依頼する』と決まったからだ」

「へえ」

その言葉を聞いて兄さんの身体がまたこちらに向き直る。ぎい、とイスが少し軋きしんだ。

「仕事？　そういう仕事を外部に出して、いいんでしたっけ？」

当然の質問だろう。確か刑事ドラマとかでも、お金を渡して、つてのは駄目だったはず。

「まあ、『情報屋』から情報を買うのと同じだ。その場にに応じて臨機応変に……だよ、手代木。報酬の支払いは現金。新しい情報が出たら払う、という条件だ。グロスじゃなく、何度でも、出てきたらのその都度つどだ。どうだ？」

——え？

「それって犯罪ですよね？」

思わず言ってしまう。そして、それを受けて当然のように田所さんが答える。

「捜査特別報奨金というのがあってね。今回の事件はそれが適用されるので、犯罪ではな  
らんだよ」

え、そうなのか。

「普通は特別重要犯罪に適用されることが多いんだけど、今回は流石にきついってことで  
浜田さんにかけてもらって、許可を取ったってわけ」

「さっきはそんなこと、露ほどにも言っただけだと思っただが？」

とは兄さん。

「いやー」

笑ってごまかそうとする田所さんに対して浜田さんが、

「俺が、本当にその情報があればこの案件の処理ができるのか、犯人が海外でもそうさせ  
ない対処ができるのか、と田所に聞いたところ、できると言いましたのでね」

「ちよっと、浜田さん…」

田所さんはばつが悪そうだ。

そこで、二人の話を遮るように、兄さんの声が響いた。

「金の話はわかった。じゃあ、もう少し捜査、事件の資料をくれ。結局わからないってこ  
としかわからん。元々は何だったわけ？」

兄さんが聞く体勢に戻ったので、話は本筋に戻った。

\* \* \*

「じゃあ、ちよつと整理がてら最初からな」

田所さんの解説が始まった。

「その企業さんの話によると、最初はいつも通り、というか、よくある企業へのハッカーの攻撃かと思っていたそうだ。そうしたことから、うち、警察への報告が遅くなった。一〇番があったのは三日前の昼だ」

「少し時間があるな」と兄さん。

「そうなんだよ。で、内容はよくある個人情報の取得。特に名前と住所、性別などのクリティカルな個人情報を抜きだそうとしている感じだったそうなんだ。最近、企業が保有している個人情報が漏洩すると、それだけで企業のイメージがダウンするってのもあって、各企業ごとにいろいろとセキュリティ会社に相談はしていたらしいんだが……さすがにどこの会社も、どうにもならなくなっとうちにかけてきたらしい。まあこの辺はまた聞きた」

「どこの会社も？」

と兄さん。

「数社ある」

そう言うのと、田所さんは浜田さんの方をちらりと見てから、また話を再開する。

「その相談を受け取って、うちのサイバー犯罪対策室が調査したんだが、普段なら二、三で終わるはずの proxy が、無<sup>むじんぞう</sup>尽蔵に増えてて追えません、っていう報告。それが来たのが一昨日の夜中。で、今日おまえのところに来た」

「そこまでわかっているなら、調べればいいじゃないか。無<sup>むじんぞう</sup>尽蔵って言ったって、限界はあるだろう？」

「追うと変えるんだよ」

少し興奮したのか、田所さんは立ち上がった。

「なんていうかなあ。proxy だと思っていたら、全然別の一般市民の PC だった」

一般市民って？

「ふうん。踏み台偽装をちゃんとしてるんだねえ」

そう答えた兄さんは、面白くもなさそうに上を見て首をかしげてる。

「なんとかならんか、手代木」

これは浜田さん。

「わかりませんね、今のままじゃ。資料は、って言ったのに解説だけです。少なくとも、個人情報 を 抜かれそうになった企業の名前くらい、教えてくれてもいいんじゃないですか？」

「数社とは言ったよな」

「浜田さん」

慌てる田所さん。

「田所、彼に協力を求めに来て、ヒントも何もなく『やれ』っていうのは、金を渡さない以上に了見違いだ。今まではおまえらの関係上、そうだったかも知れないが、今回はきちんとした『依頼』だということを忘れるな」

「はら」

怒られたような気迫に、田所さんの声が小さくなる。

「会社名でないと駄目か？ 業種でもヒントにならないか？」

兄さんを見る浜田さんの眼は、なんだか父親が子供を見てるような感じがした。

そう言われ、上を見て所在なさげに首をかしげていた兄さんは口を開いた。

「業種も特殊なら、いいですよ。細分化できるレベルなら……」

「製薬会社。それも製造系だ」

兄さんが言い終わらないうちに、浜田さんが答えた。

兄さんはしばらく、喋っていたままの口を硬直させていたのだけど、その口の形が徐々にゆがみ、笑みに近くなる。

「調べましょう。で、皆さん。邪魔なのでお帰りください。こちらからまた連絡致します。」

優吾、送ってあげて」

それだけ言うと、兄さんはくりりと背を向けてPCに向かい、後ろにはもう誰もいないかのように打鍵音を響かせ始めた。

作業に没頭し始めるとこうなるのは、一緒に住むようになってわかってきた。これは集中モードに突入した証拠で、兄さんの方からアクションがない限りこちらの声は届かない。「手代木、頼むな」

田所さんはそう言い、部屋を後にする。

浜田さんはしばらく兄さんの方を見てからドアの方に向かい、兄さんの方に向かって深々とお辞儀をした。そして、顔を上げると、

「お邪魔した。今日はこれでおいとまさせていただきます。また、何かあったら連絡してほしい」

そう言うと、名刺を差し出した。「京都府警 浜田順一」とある。

「まあ個人の携帯番号も書いてあるので、これにかけてくれると話が早い。それでは頼みます。では」

玄関に行くと、田所さんはずでに靴を履いていた。

「菊宮くん、明日か明後日かわからないけど、なんかあったらなる早で連絡してくださいな」

靴のかかとを靴べらで直してこちらに向き直った浜田さんは、また会釈をしてから、「お邪魔した。では」

と言ってドアを開けて出て行った。

居間へと戻ると、まだカチャカチャと勢いよく打鍵音があたりに響いていた。それをちらつと見てから、部屋の片づけをする。片づけを済ませると、随分遅い時間だった。

「兄さん、お休み」

と、打鍵音を響かせる背中に一声かける。

こういう時に声をかけても、全く覚えていない人ではあるのだけど。

\* \* \*

翌朝。起きて居間に行くと、まだモニターは煌々<sup>くわんくわん</sup>と点いていて、その前の兄さんは精神的にキーボードやマウスを操作していた。

寝てないのかな？

そうは思ったけれど、何かを言うわけでもなく自分の仕事、朝ご飯の支度を始める。

今日は、少し早めに大学に行こうと思っていたので、あまり手間をかけられない。ベーコンがないので、ハムを焼いてハムエッグとトースト。あとは珈琲を淹れて、オレンジジュースも。野菜は、レタスを中心としたサラダ。

このサラダは、買ってあった野菜を水洗いして切ってボウルに盛るだけだ。

「兄さん、朝ご飯できたよ」

そう声をかけると、

「ん、後で食べる」

と、返事だけは返ってきた。

なので、自分だけささっと食べて、兄さんの分はラップをかけておく。サラダは冷蔵庫に、それから、珈琲はサーモマグに入れる。

こういう時に言葉で伝えても聞いていないことが多いから、どこに何があるかメモを残して、家を出る。

「行ってきます」

今度は返事もなかった。

\* \* \*

午前の授業が終わり、学食で定食を食べていると、背中ごしに声が聞えてくる。

「ネットで検索して、その結果を出せば良いんだよ」

「ほんとかよ、悪いやつだなあ」

学生同士の他愛もない会話だが、ネットという言葉になぜかひっかかりを感じた。

いつも一人で食べている所<sup>せ</sup>為<sup>い</sup>か、つい周りの会話を聞いてしまう。悪い癖だな……と少し自己嫌悪しつつも、耳をそばだててしまう。

「だって、あいつ金は持つてるんだし、貰うのは問題ないだろ」

「でもおまえ、なんにも知らないんだろ？ そのネットの有名人のこと」

「だな、検索サイトで調べた程度。ほんの二、三行くらいの情報しかわからなかったよ」

「彼女だってそれくらいは知ってるだろ？ 検索とかできないって感じじゃなかったし」

「……だろうね。でも、俺に何か知らないかって聞いてきたんだ。検索サイトの情報を渡

して金を貰うさ」

「悪い奴だな」

「先に、検索結果ではお金は渡さない、って言わないのが悪いってことだよ」

ふうん。うちの大学にもひどいのがいるんだなあ。

そんなことを思いつつ、食器を返却口に持っていくと、先ほどの声の主らしき人たちと眼が合った。二人いて、その片方だろう。

ああ、この人は見たことあるな……誰だっけ？

すぐには思い出せず、向こうも声をかけてくるということはなかった。また会うことがあれば、思い出すのかな。どうも、直接会話をしないと顔を思い出さないんだよね……。

しかし、その再会は、すぐに訪れた。

先ほど、酷いことを喋っていたほうが、午後のゼミで僕の二つ隣に座っていた。

彼はちらりとこつちを見て、目配せめくばせをしてくる。でも、意味がわからない。とりあえず首をかしげておく。誰かと間違えてるってわけじゃないよな……。

いったい、なんだろう。

\* \* \*

家に戻るとまだ兄さんは作業をしていたが、朝作っておいたご飯はなくなっていた。

「ご飯、食べたんだ」

そう言うと、

「ああ」

という返事は戻って来た。

少し休憩してから、食器を片づけたり、ちょっとした掃除をしていると、兄さんが僕を呼んだ。

「優吾、田所に電話をかけてくれないか。こつちはもう少し作業があるので、相手をする時間があまりない。来てもらえれば見せつつ説明ができる、とでも言ってくれ」

「電話番号は？」

そう言うと、電話番号らしき数字が書かれたメモを渡される。

「名刺に書いてあるのは別の、個人の携帯番号だ。そっちにかけてくれ」

「なんて言えば？」

「そうだな、『とりあえず、来い』だけでいい。アイツならそれでわかる」

「どういうことだ？」

田所さんの言葉には、怒りがこもっていた。

「さっき言った通りだ。これは犯罪にはならないし、警察がどうこうできるものではない」

「それは……」

「ああ、『警察では無理だから手を引け』と言ったのが気に障さわったんなら謝る。まずは説明していくので怒りを少しほどいて、冷静になつてくれないか？ 会話のたびに、恫喝してのような強い口調で話されちゃかなわん」

「あ、ああ。すまん」

腰を浮かせていた田所さんは、椅子へと座りなおした。

「若い頃から直情系なのは変わらないな、おまえは……。ちょっと説明は長くなりそうだな。優吾、田所達に何か飲み物でも出してくれ」

そう言われたので、ひとまず台所でやかんを火にかけ、急いで戻ってきたら、もう兄さんは話し始めていた。

「順序立てて話した方がわかりやすいか？ それとも、調べたところだけかいつまんで話す方がいいか？」

「最初からでお願いする。こちらはやはり刑事捜査が基本で、サイバー系のこととはまた聞きのまま聞きといた感じがよくわからん」

そうリクエストしたのは浜田さん。

「ふむ、了解した。では、この事件……事件というべきか、この情報漏洩にまつわること、かなり大掛かりな話だと推測する」

「推測？」

また声を荒らげ気味になる田所さんを、浜田さんが手で制し、兄さんの話を促す。

「確定にはならないが、そう思った方が合点がいくから『推測』という言葉を使ったままで。断定は性に合わないからな。特にそいつらが、その意思を持っていたと証言しない限りは」

兄さんは言葉を続ける。

「最初、中国の各サーバーからの攻撃かと思っていたが、攻撃元のアドレスを見ていくと、大半が日本からになっていた」

「ああ、だからそれが proxy じゃないか、っつ？」

「違うな」

兄さんは、田所さんの突っ込みをすげなく否定する。

「今回、企業へ攻撃をした中国サーバーが、Proxyサーバーであったのは事実だ。だが、話  
がややこしいのは、中味を見ると大半の Atta ックは日本の『一般のユーザー』からだった  
ってことなんだ」

「中身を……って、見られるのか？」

「田所、そう頻繁に話を止めないでくれるか？ きちんと質問の時間は作ってやるから」

「すまん」

「まあ、不思議に思うのは仕方ない。種明かしをすると、前にそっちが『製薬会社』と言  
ったので、製薬会社のアドレスを全部調べて、その途中経路にお邪魔してそのパケット  
流量と先アドレスを全部調べた……というわけだ」

「全部!？」

「全部って、おい……」

僕にはあまり実感がないけど、田所さんも、浜田さんも面食らっている。

「昨日の夜からさっきまでのデータだから、時間にしては二二時から二四時間、その間  
大体八五〇〇万件ほどのアクセスがあった。日本の各製薬会社、大体新薬開発をしている  
製薬協に登録してる会社で、ネットワークに入ってるどころだから約八〇社だな。で、そ  
の八〇社へ流れるパケットデータから、D B <sup>データベース</sup>アクセスや H T T P アクセスの P o r t デ

ータを集約して調べた。他のUDPや別のport使ってるようなデータは記録はせずに、  
ってだけだ」

「だけっておまえ、こんな短時間に？」

「少し時間がかかったな。その辺はすまない」

「謝るところじゃないだろ」

あきれながらも感心したような田所さん。

そこで、ちょうどお湯が沸いたので、台所に戻りお茶を淹れる。

ぱたぱたと僕の足音だけが響く。台所へ移動したあと、まだ兄さんの話が続けているの  
が聞き取れた。

「まあ、ちよつとずるいことをしたので、方法については聞かないで欲しい」

「はあ」

「ま、わしらじゃまったく意味不明だが」

田所さんも浜田さんも何か押されてしまった様な空気になった。

「どうぞ、お茶です」

そんな中に、淹れたお茶を出す。

「どうも」

「ありがとう」

お二方にお礼を言われると、少し照れてしまう。兄さんにもお茶を渡して、また隅っこで話を聞く。ずつ、と茶をすする音が響いたあと、

「——で。調べたのだが、そういうしていくと『ああ、これは警察が事件としては追にくいものに見える』ということに直面した」

「追にくいもの？」

「警察つてのは、被疑者、つて言うんだっけ？ 被告人というのが確定されないと訴追そつひできない、つて聞いたけど間違つてないか？」

「被害者がいれば、被告不明のまま捜査はできるが、それ以上は難しいな」

「そうなったものは継続捜査になる。つてもものが多いか」

と、二人が言ったところで、

「まあそういうことだ」

「被告が見えない？」

「それに非常に近いな。誰、というのが多すぎて全員を被告人として見る。もしくは、誰もが『被害者』ということにするか、だな」

「ごめん、話が見えない」

うん、僕にもまったく見えない。

そんな時、浜田さんがすぐくむずかしい顔をしながら口を開いた。

「警察のことは今は置いておいて、どうなのかの説明の続きを頼む。それ以降の判断はこちらにさせて欲しい」

兄さんはちらりと浜田さんを見て、

「わかった。では説明に戻る。先アドレスを調べた結果、かなりの数、一〇〇〇万単位の一一般ユーザーのPCが踏み台、もしくはProxyにされていたことがわかった」

「はあ？」

「そして、その二、三件の踏み台にされたユーザーのPCでセキュリティが弱かったところもまた調べたところ、動画サイトに行った後、そういう行動をするようになった」

「動画サイト？ YouMovieとかそういう？」

田所さんが言うYouMovieというのは、大手検索サイトがやっている世界規模の動画サイトだ。最近ではそこからスターがうまれるので、新しいTVとも言われてるらしい。

「それ」

兄さんが声と共に田所さんを片手で指さす。

「は？」

「まさにそこ、YouMovieに行っただけからそういう行動をするようになった、ってことだよ」

え？ そんなこと……。

「そんなことできるのか？」

僕が思っていたことを、田所さんが代弁してくれた。

「できる、というか、やってるしね。詳しい説明、というか想像も入るけど……要るか  
Sc。」

そう言うのと浜田さんが、

「できればして欲しい。こちらが納得できるかは別として」

「うん。田所はどうだい？」

「中途半端よりはきちんとしてくれ」

そう言われ、髪をかりかりとかいた後、兄さんは言葉が続けた。

「最近、movieを観る、という行為の最中にscript、まあプログラムみたいなのを実行できるようになってきたんだ。それはYouMovieとかだけではなく、普通のWeb上でのmovieでもscriptが動くものは大体ね」

そう言って茶をすすり、また話を続ける。

「つまりmovieを観た人のPCを踏み台にしての攻撃、というのが今回の事件かな」

「でも、兄さん。それだとmovieを叩いた人を辿れば犯人にあたりませんか？」

と、僕は疑問に思い、つい質問をしてしまった。

「そう。movieが『特定できれば』ね」

「えっ」

「movieの特定ができないんだ。とうとうより『どのmovieを見てもひっかかる人はひっかかる』かな」

「全部のmovieに仕組まれてる、ってこと?」

「そうとも言えるね」

「だとすればYouMovie本体なのか?」

と田所さんが聞くと、

「それはどうか、わからない。けど、実際その線も考えたほうがいいのかも知れないね」  
そう言うとき少し上を見て、一呼吸してからまたこちらを向いて話を再開する。

「続けよう。ちょいちょい脱線してしまったから順番だけ先に言おうか。踏み台にされたPCは総じてYouMovieに置いてある動画を観たものであり、特定できないどころか日々増えていっている。そして、その元にある『情報の取得したのを受け取る場所』が隠れているわけなんだけど、それが『国』というところで止まってしまっている」

「国?」

「そう、国。お隣の巨大国家だよ」

「はあ?」

「国の各種サーバーにデータを分散して送ってる。それこそ全ての取得した個人情報を通じて、連続に、ピアツーピアって奴だな」

「それは……」

「だから、先ほど言ったことと重複するんだが、『これは警察が事件としては追いかくにも  
の見える』と」

「容疑者が複数いるから、ではなかったのか？」

「容疑者が複数いる、というのもある。そして、容疑者の送信先が国、というのもある。

——で、その辺を踏まえて、日本の警察としてはどうしましょうか？」

辺りは、水をうったように静かになった。

\* \* \*

数分経った後、ようやく浜田さんが静寂を破った。

「対、国か。そうなると一警察の出番ではなくなりますな」

少しして、田所さんも重い口を開いた。

「何も、できないのか？ 取られるままなのか？」

そう言われた兄さんは、少し首をかしげてから、

「ある程度は取られるまま、だけどね」

「ある程度？」

「ネットに繋がってる領域は、つてこと。取るための行為を許してしまっているんだけど、

それは口が開いてるからに過ぎない。——ってことは、口をある程度閉じれば、ある程度まで済むということでもある」

「それは……どうすればいいんだ？」

「これは、一企業や一個人が企業相手に言うよりも、警察機構が言うほうが効果があるはずだね。メールでもなんでも、公的な文章でこう書いてあげればいいんだ。『外部と繋がっている部分を制限しないと、全てのデータが漏れてしまいますよ』と。サイバー課の名前で出してあげるのがいいかも知れない。そうすれば相手企業……製薬会社も馬鹿じゃないから、ネットに詳しい担当社員なり、委託先の外部企業がきちんとしてくれる」

「するかな？」

と、不安そうな田所さん。

「するさ。何社かは警察に相談に来たんだろう？ 漏れていると思われまます、なんとかしてください……って。それで警察が調べたら漏れている。『漏れてますよ、閉めないで駄目ですよ』って言ってあげる。話は通るよね」

兄さんは、自信たっぷりにそう言いきった。

「それじゃ、これで帰ります。菊宮くん、世話になったね」

「田所さんもお疲れさまでした」

田所さんを玄関で見送った直後、浜田さんがトイレから出てきた。

「今日はお疲れさまでした。田所さん、先に戻られましたよ」

「そうか。じゃあコレ、あいつ……手代木に渡しておいてくれ。今日の礼だ」

封筒を懐から出して手渡された。

「ありがとうございます。渡します」

「まあ、あいつにとっちゃ微々たる額かも知れんが……。手代木は、最近元気かい？」

「そうですね、まあ」

「そうか」

「ってアレ？」

「すみません、浜田さん」

「ん？」

「浜田さんと兄さんって、知り合いなんですよね？ 兄さん、浜田さんの名前を呼びもし

ませんでしたけど……？」

先ほどのまで会話で、ずっと気になっていた。

「ああ、そうだな。手代木は昔、俺が捕まえた……逮捕したことがあるからな。それは向

こうも覚えてるし、思い出したくないことでもあるだろうしな」

「え？」

「詳しいことは、本人に聞いてくれ」

そう言うのと、浜田さんは僕の横をすり抜けて玄関から出て行った。

「また来る」

玄関のドアを閉める際、そう一言言い残して。

次回〈試し読み第三回〉更新日は**9月1日**です。

[『手のひらの露』作品ページはこちら](#)